

# 乳幼児の心を育む絵本・お話の世界

幼児教育学科 永 富 富美子

## 1、はじめに

幼児は、絵本・お話が大好きー。

公立・私立幼稚園で35年間、現在も時折 幼児と絵本・お話の世界を共有して、その意義と魅力の大きさを益々感じるのである。入園当初「おかあさん」と不安を訴える幼児も、マンツーマンや小グループで絵本を見て語りかけると、思わず絵本の世界に引き込まれ、「もう1回読んで」と笑顔が現れる。落ち着きなく集中力に欠けがちな子どもも、素話を語り始めると、身を乗り出し目を輝かせる。身体的には静止しているように見えるが、その子の頭と心は、フルに活動しているのである。

ところが、現代社会では、情報文化の波が大変な勢いで子どもに迫り、子どもを取り囲んでいる。安易な商業主義が、子どもの心の成長を阻んでいないかと危惧せざるを得ない。自分自身の幼少時代と現代の社会環境を比較すると、物は驚異的に豊かになり、利便性が高まり、大きく変貌した。しかし、人の心は豊かになったと言えるだろうか。

心のすさみが懸念される今、子どもの成長にとって「心の栄養」としての絵本・お話の実践をより深めたいと願う。本学の授業や、保護者対象の講座、実践を通して、分析・考察を進めていきたい。

## 2、「絵本・お話の世界」を通して育つもの

すぐれた絵本やお話は、子どもの心に語りかけ、心を揺さぶり、子どもの心を豊かに育てる。

乳幼児への様々な働きの中で、次の3点を中心に考察したい。

### ① 想像力を豊かに育む。

乳幼児期の特徴は、感性が鋭敏で、想像力が豊かなことである。

特に幼児期は、想像力の花開く時期。幼児は、想像の翼を広げ、自由に夢の世界を駆け回ることができる。この想像力が原動力となって、創造性を育むのである。

ジェラルデン・B・シックス氏は、「子どものための創造教育」の中で、「創造とは現実を超えて、あるべき姿を想像することから始まる。『こうだといい』『こうしたい』『こうあってほしい』というヴィジョンが、創造の原動力となる。人間の創造力とは、幼年期からその持てる想像力を自由に解放して育て、それを発揮することにより次第に強固なものとなる。— 中略 — 子どもの想像力は開発されなけれ

ばならない。子どもの持っている想像力も開発されないとずっと眠ったままであり、役に立たないものとなる。」と述べている。子どもの想像力を育てることの意義は大きい。

(本学紀要 第30号筆者「幼児の想像力と遊び」より)

絵本の場合、絵と言葉の両方のイメージが、子どもを想像の世界へといざなう。

「だめよ デイビット」(デイビット・シャノン作 評論社)の絵本で、デイビットが大きく口いっぱい食べ物(人参、ブロッコリー、鶏肉などなど)を入れた場面を見て4歳児が「口の宇宙や」と叫んだ。実践しつつ、幼児ならではの発想にはっとさせられた体験がある。

お話は、聴覚を働かせながら、語り手の言葉からイメージを浮かべて、子ども一人ひとりが想像の世界を楽しむ。語り手は想像の種を渡すだけ。子どもが想像の花を咲かせるのである。幼児の目をみつめ、幼児とお話を語り、想像の世界を共有するとき、語り手は、最高にしあわせを実感することができる。昔話を付属幼稚園で、筆者が5歳児に語った際、「身動きせず聞き入っている子どもを見て、身震いしました。」という学生の感想が心に残っている。

## ② 人と人との心の触れ合いを深める。

子どもに心をこめて絵本やお話を語るとき、子どもは語り手と共に、イメージの世界を心ゆくまで楽しむことができる。絵本やお話の世界を通して、温かい人間関係が育ち、子どもの内なる世界が豊かになるのである。「お母さん、絵本読んで」「お話して」という欲求は、子どもの愛情欲求とも言える。子どもは、語り手から愛情をもらうのである。ここで、「ブックスタート」について述べたい。

### ブックスタートとは

1992年 英国のブックトラスト(民間の教育基金団体)が地元バーミンガムで始めた活動である。日本では、2000年「子どもの読書年」を機に始められた。地域の保健センターで行われる0歳児検診などの機会に、すべての赤ちゃんと保護者に、絵本などが入ったブックスタート・パックを手渡す運動である。

赤ちゃんの体の成長にミルクが必要なように、赤ちゃんのここと心と心を育むためには、あたたかなぬくもりの中で、やさしく語り合う時間が大切です。

また赤ちゃんに向き合うそうしたひときは、周りの大人にとっても心安らぐ楽しい子育ての時間になります。

ブックスタートとは、肌のぬくもりを感じながらここと心を通わす、そのかけがいのないひときを、「絵本」を介して持つことを応援する運動です。

(「ブックスタート ハンドブック」NPOブックスタート出版より)

日本の「ブックスタート支援センター」では、「子どもの読書活動の推進ための方策」の最後に、「司書、保健所、保健師、地域のボランティアなどが、連携・協力して、乳幼児の読み聞かせの方法などを説明しながら、保護者に絵本などを手渡す活動を実施する」と明記されている。

ブックスタートの対象年齢は、保健所検診にくる年齢であるとして決まてはいないが、わが国の実情に合わせれば、生後3～4ヶ月が下限ということになる。

(「変貌する現代絵本の世界」永田桂子著より)

#### 絵本アンケート

- 1、対象 ；本学附属幼稚園保護者65名と佐保短大附属幼稚園4歳児保護者33名；計 88名
- 2、実施日；2007年3月・2007年6月
- 3、絵本の読み聞かせは、何歳からでしたか。

生後 1ヶ月 から	5名	5%
3ヶ月	12名	13%
6ヶ月	23名	24%
8ヶ月	4名	4%
10ヶ月	8名	8%
1歳	29名	31%
2歳	11名	12%
3歳	3名	3%

- 4、どんな赤ちゃん絵本を喜ばれましたか。

1	いない いない ばあ (松谷みよ子作)	40
	いない いない ばあ (ノントンシリーズ) ほか	3
2	ちいさなうさこちゃん (ブルーナー作 ミッフィイー)	13
3	はらぺこあおむし (エリック・カール作)	11
4	しろくまちゃんのホットケーキ ほか (わかやま けん作)	7
5	もこ もこもこ (谷川俊太郎)	6
6	ノントン シリーズ (おおとも やすおみ作)	5
7	ぐりとぐら (中川李枝子作)	4
8	がたんごとん	3
9	きんぎょがにげた (谷川俊太郎作)	3
10	のせて のせて (松谷みよ子作)	2
11	あーんあーんの本 (せな けいこ作)	2
	ぞうくんのさんぽ (なかの ひろたか作)	1
	びりびり (東 君平)	1
	タンタンのズボン (いわむら かずお)	1
ほか	生活しかけ絵本、おててがでたよ、ミッキーマウス	
	おやすみなさい、ばいばい、たんたんぼうや、こども図鑑	

	○主として誰がよみきかせを？（乳幼児対象）	（８８人中）
	母親が読み聞かせをしている	８１名
	子どもが一人で見ている	７名
	父親もよく読み聞かせている	２５名
	ほかに、祖父母・兄弟姉妹	若干名
	○読み聞かせの回数	
	毎日 ほぼ１回	３７名
	週に ３回ぐらい	３３名
	週に １回ぐらい	８名

### アンケート（園児保護者対象）のまとめ

- 赤ちゃん絵本のスタートは、総合すると、０才児までが54パーセント、１歳以後は46パーセントである。内訳けとしては、１歳からが最も多く（31パーセント）次に６ヶ月（24パーセント）という数値がでた。
- 語り手は、母親が最も多く、次いで父親、祖父母、兄・姉であるが、「子どもがひとりで見ている」が意外と多い。（８パーセント）
- 赤ちゃん絵本の題名としては、群を抜いて「いない いない ばあ」（松谷みよ子作）が多い。全体に、乳児に適したよい絵本が選ばれている。しかし知育絵本、図鑑を早くから与える傾向も見られる。
- 乳幼児に絵本を読み聞かせる回数については、ほぼ毎日が予想より多かった。が反面、家庭では、ほとんど読んでいないが10名ほどみられた。

### ③ 生き方を学ぶ。

子どもは絵本やお話の世界の中で、さまざまな心情を味わうことができる。人が生きていくうえでの大切なこと—自分で考え行動すること、思いやり、愛すること、力をあわせること、勇気、困難をのりきること、あきらめないこと、最後まで努力することなど—を感じ取るのである。絵本やお話には、テーマがあり、子どもに感じてほしいこと・子どもへのメッセージが内在している。

故吉岡たすく氏が主宰された「伸びる児童文化研究会」に長年所属し、児童文化（主として、絵本・お話・人形劇・劇遊び）の理論と実践を通して、実に多くのことを学ばせていただいた。吉岡たすく氏は、お話の世界について、次のように述べている。

「話を聞いているとき、子どもはその話の主人公になっているのです。主人公と自分が一体となってその話を聴いています。いや聴いているというよりは、その話のなかに溶け込んで、主人公となって生きているのです。」

例えば、{|一寸法師|} の話を聴いているときには、子どもは一寸法師になってしまっています。子ども自身が、お椀の舟で川を上り都へ行って、あの悪くて大きく強い鬼と戦って勝つのです。一寸法師の喜びが、即ち自分の喜びなのです。{|ジャックと豆の木|} の話を聞けば、ジャック少年に自分がなりきって、天にのぼって冒険するのです。一中略一話の主人公が生きていく中で、いろいろな気持ちを味わっていくのを、自分も一緒になって味わえるわけです。

「童話は人生学です」の章の中で、「童話は、人生の味わい方とその深い光と喜びとを教える」と、童話作家・坪田譲治氏のことばを引用している。

(「子どもは話が大好き」吉岡たすく著より)

実体験の乏しい幼児にとって、絵本やお話の世界の中で、さまざまな体験をしつつ、生きる力を自分のものとして、心の奥深く蓄えていくのである。子どもは、今まで知らなかった世界を体験することによって、目を輝かせ心躍らせる。

### 3、授業や講座を通して「絵本・お話の世界」を考える。

本学で、児童文化の授業を担当して6年目となる。絵本や素話・紙芝居・ペープサートなどの実践や研究の中で、学生の抱える問題点を考察したい。授業の中に、本学付属幼稚園の園児を対象とした実践を入れて、生きた幼児の反応から学ぶ機会を作っている。その実践も踏まえて考察したい。

また、幼稚園の保護者を対象に「絵本・お話の講座」を継続的に、或いは単発的に開催させていたっている。特に、心を育む絵本・お話の世界で、いま求められているものを見つめたいと思う。

#### ① 絵本・お話をどう選ぶか。

今、書店の絵本コーナーに行くと、溢れるほど様々な乳幼児向けの絵本や漫画の本が、ぎっしり並んでいる。すぐれた絵本やお話を選び読み聞かせたいと願うのは、当然のことである。学生に、まず自分でよいと思う絵本を選ばせてみる。1番多いのは、自分自身が幼少のとき親や保育者に読んでもらって心に深く残っている絵本である。ついで、かわいいから、きれいだから、好きだからなどの理由で、手じかにあるものを選んでくる傾向がみられた。雑誌の付録のミニ絵本を持ってくる学生も少数いた。

#### ○ よい絵本とは

絵本と言っても、幅広く・物語絵本・科学絵本・生活絵本・文字の無い絵本・知識や図鑑・しかけ絵本・布絵本など様々である。ここでは、乳幼児にとってより魅力的な絵のイメージを大切にした絵本と、フィクションの世界―物語絵本―を中心に考えたい。

#### ● 心をこめて作られ、乳幼児の感性と想像力を豊かにする絵本。

乳幼児だからと子どもを甘く見たり、小さい子どもだから可愛ければいいと安易に作っている絵本が結構多い。作家 松谷みよ子氏は、自分の子どもにはじめての絵本を与えたいと思ったが、見つからなかったため、自ら「いない いない ばあ」を作ったと講演で語っていた。小さい子ども

だからこそ、すぐれた文学であり、美術であるべきだろう。

- テーマが明確で、子どもが共感できるもの。

子どもに感じてほしいこと、子どもへのメッセージ（人が生きていくうえでのたいせつなこと）は、押し付けるものではなく、子どもが感じ取るものということを忘れてはならない。

- 絵の色調がよく、丁寧に描かれている。

絵のイメージが絵本の大きな魅力である。「えほんのせかい・こどものせかい」（松岡享子著）の中で、松岡氏は、「幼児の時代は、絵でものを考える時代です。」と述べている。絵がことばを語っているといえる。子どもは、絵から想像の世界に入って楽しむのである。

ほとんど文字の無い絵本―「もこもこもこ」（谷川俊太郎作）「びりびり」（東 君平作）「タンタンのズボン」（いわむら かずお作）などが長く子どもの心を捉えて離さないことからもうなずける。

- お話が単純明快で、ことばも精選されている。

無駄なことばがなく、子どもにとってここちよいリズム・テンポがある。説明的なことばでは、イメージは浮かばず、子どもは興味を示そうとしない。多くの幼稚園・保育所で子どもたちに変人人気のある絵本「もこ もこもこ」（谷川俊太郎 文・元永正 絵）について、松居 直氏は次のように述べている。（「絵本の森へ」日本エディタースクール出版）

「擬音語や擬態語が、とても効果的に使われ、ことばの音が見える絵本である。単純な絵と頭で割り切らず、むしろ丁寧に絵を楽しんでほしい。形や線や色の語りかける声なき声に耳を傾けてほしい。絵の中にはたくさんのことばがあるのだから。」

心に残る絵本として、学生が多くあげるのに「ぐりとぐら」（中川梨枝子さく）がある。

前述の「えほんのせかい・こどものせかい」の中で、松岡氏は、次のように書いている。

「ぐりとぐら。文章は、すなおで歯切れがよく、そのまま読んでいけば、ひとりでに調子がついてくる。着想のおもしろさ、絵の愛らしさもさることながら、文章に内在するリズムが、この絵本の大きな魅力となっている。」

- 登場人物が、子どもにとって魅力的で、生きている。

主人公に同化して聞いている子どもに、人物の心情的イメージは生き生きと伝わる。ドキドキ・わくわくしたり、ほっとしたり、うれしくなったり、いろいろな気持ちを味わうことができる。

- 話の展開を予想する楽しさがある。

想像力を働かせて次の場面を予想し、あたったり、はずれたりすることを楽しむ子どもたちである。

特に繰り返しの展開を喜ぶ特徴がみられる。（「三匹のこぶた」、「三匹のやぎのがらがらどん」「三枚のお札」など、子どもはとりわけ3回の繰り返しを喜ぶ）

学生対象アンケート・絵本 お話研究より

幼児に読み聞かせたい絵本

順位	題 名	順位	題 名
1	はらぺこあおむし	2	ぐりとぐら
3	ぐるんぱのようちえん	4	ぞうくんのあめふりさんぽ
5	三びきのやぎのがらがらどん	6	スイミー
7	おおかみと七匹のこやぎ	8	どろんこハリー
9	おおきなかぶ	10	てぶくろ
11	おいしいのぼうけん	12	すてきな三人ぐみ
13	わたしのワンピース	14	かいじゅうたちのいるところ
15	キャベツくん	16	ぞうくんのさんぽ
17	そらめくんのベッド	18	はじめてのおつかい
19	ガンピーさんのふなあそび	20	どろんここぶた
	せんたくかあちゃん		だめよ デイビット
	じごくのそうべい		ずっとずっとだいすきだよ
	おじいちゃん		11匹のねこ
	そらいろのたね		ねずみくんのチョッキ
	わたしとあそんで もりのなか		じゅげむ
	にじいろのさかな		おたまじゃくしの101ちゃん
	くれよんのくろちゃん		三びきのくま
	びりびり		わすれられないおくりもの
	うんちしたのは だれよ		にんぎょひめ
	ピーターパン		スーホーの白い馬
	ロバのシルベスターとまほうのこいし		100万回生きたねこ
	泣いた赤鬼		地雷ではなく花をください
	ももたろう		こすずめのぼうけん
	さっちゃんのまほうのて		かさじぞう
	とんぼのうんどうかい		もちもちの木
	かぶとくん		しろくまちゃんのほっとけーき
	こんとあき		おおきなおおきなおいも
	ぶたのたね		はけたよはけたよ
	おばけのバーバパパ		しろいうさぎとくろいうさぎ

○ 素話・お話研究の題材（学生が選んだお話）

1	おおきなかぶ	2	ももたろう
3	三枚のお札	4	三匹のこぶた
5	さるとかに	6	おおかみと七ひきのこやぎ
7	赤頭巾	8	三匹のくま
9	うさぎとかめ	10	かさじぞう
11	いっすんぼうし	12	ちいさなモモちゃん
13	くまの子ウーフ	14	花咲きじい
15	てぶくろ	16	金のがちょう
	うりこひめとあまんじゃく		つるの恩返し
	いたずらラッコとおなべのほし ジャックと豆の木 エルマーのぼうけん いやいやえんお菓子の家 おんちょろちょろ さるとかに いかり地蔵 てぶくろをかいに おしょうさんとおもち		イソップ童話

- 友達や教師、自分自身の実践、教材研究を通して、次第によい絵本・お話を選ぶ力が育ってきたと感じた。
- お話の題材としては、日本昔話・外国の昔話を進んで選ぶ学生が多い。  
話の構成の骨組みがしっかりしていて語りやすいこと。また、心の奥深いところに働きかけてくる昔話の魅力を現代っ娘も感じとるからであろう。  
河合 隼雄氏は、「昔話の深層」のなかで、次のように述べている。  
「昔話は、心の構造を象徴的に表現する。」  
「昔話を、単純で馬鹿げている、非現実的なことを、子どもに与えるものではないと極論する人もいるが、現在ではその復興の勢いさえ感じる。  
すぐれた昔話は、次の世代へと語り継いでいってほしいものである。」
- 「地雷ではなく花をください」「いかり地蔵」などのお話を、平和を祈り、心をこめて実践した学生がおり、教室全体に感動が伝わった。
- 「おじいちゃん」（ジョン・バーニンガム作）、「わすれられないおくりもの」（スーザン・バーレイ作）「ずーっとずっとだいすきだよ」（ハンス・ウイルヘルム作）など、「死について」がテーマとなる絵本が挙げられている。「愛しているものが、死んでも心に生き続けている」というメッセージは子どもにも学生にも強く届くのだろう。

## ② 絵本・お話をどう語るか

子どもは、心をこめて語りかけてくれる大人に愛情を感じ、情緒的に安定する。

さて実践となると、読み方・語り方を迷ったり、疑問を持つ人も多い。どう語れば、絵本やお話の世界を子どもは楽しみ味わうことができるだろうか。

### a 絵本の語り方

- ゆったりとリラックスした楽しい雰囲気の中で。

話者自身が、自分の都合で急いだり、早く眠らせようとしたりすることが多い。(母親によくみられる)

園の集団での読み聞かせの場合、「お口チャックに手はお膝」「しずかに」など子どもに要求してから始める保育者も時折みかける。子どもの反応をシャットアウトしてしまっているケースである。

- 絵をよく見て、楽しめるように。

子ども一人ひとりに絵がよく見えているか確かめる配慮が必要である。(集団の場合、大体扇型に集めると、見やすいし、固まることで子ども同士、より感動が伝わりやすい。また文字が少ないと大人は早くページをめくってしまい勝ち。絵のイメージからゆっくり想像を広げて楽しませたい。また 子どもは細部までよくみているので、指などで絵を隠してしまわない心配りも必要となる。

- 自然な聞きやすい声で。

子どもに届くはっきりとした発音で、話すようところがけたい。(もちろん、日ごろの保育でも必要なことである。)

松岡氏は、「すなおに、飾り気なく、心をこめて読んであげてください。」

「子どもに、本を読んでやるのは、子どもを物語の世界で遊ばせてやるため、演技者としての私たちを印象づけるためではありません」と書いている。(「えほんのせかい・こどものせかい」より)演技過剰で語ると、「先生、ようやるなあ」とフィクションの世界から現実にもどってしまう。このことは、お話を語る場合にも言える。

絵本では、わざとらしい声色や指さしも避けるようにしたい。

- 話者自身が絵本を心から楽しむ。

乳幼児は、前述のように、感覚的に絵本を楽しむ。大人が、説明したり、教訓的に扱ったり、質問したり、一方的に思い出させたりすると、子どもは絵本を好きになり、楽しいと思うだろうか。

松岡氏は、「えほんのせかい こどものせかい」で、こう述べている。

「物語絵本は楽しむもの。どうぞ、質問魔・説明魔にならないでください。・・・・・・」

絵本を見ながら、知識を増やしたり、確かめたりすることもいいことですが、物語の世界にはいりこんで、現実とは別の世界での体験をすることは、もっと貴重なことではないでしょうか。」

お母さんから「今まで、本を読んだら、必ず質問をしていました。」とか、学生からも「実習で

絵本を読みっぱなしにしないで、子どもにいろいろ聞くように言われました」など時折耳にする。  
大人が、無理に言わせることは避け、子どもに絵本の余韻を十分楽しませたいものである。

- 絵本のイメージに合わせて、ページのめくりかたを工夫する。  
絵本の世界のイメージを大切に、ページのめくりかたに気配りをしたい。また そのお話と合ったリズム・テンポにも配慮したいものである。
- 子どもの反応を敏感にキャッチしながら語る。  
“どこでどんな反応をするか”をとらえ、子どもの世界・絵本の世界を共有するとき、心の触れ合いを感じ取ることができるように思う。

## b お話の語り方

- 話者自身が映像を鮮やかに浮かべて話す。  
学生の素話実践で、話の途中まっしろになり、中断してしまうことがある。  
子どもたちは、「それで」と促したり、「わすれた？」と心配したり、現実の世界に戻されてしまう。お話を文字で覚えずに、映画に写して見るのが大切。もちろんよく教材研究をして、お話を自分のものにすることである。
- 説明的でなく、ドラマ的に語る。  
お話を説明的に語ると、子どもはすんなり想像の世界に入ることがむずかしい。  
声の調子（高低、長短、大小、強弱、緩急、明暗など）でずいぶん情景的イメージ・心情的イメージが伝わるものである。
- 間の取り方、ジェスチャーについて  
適切な間によって、お話は 聞き手の心にしみ込んでいく。また 間によってお話の展開を予想する楽しみも生まれる。  
わざとらしい動作は、かえってお話の世界のイメージをこわしてしまう。語り手は、十分気をつけなければならない。

「子どもは話が大好き」のなかで、吉岡たすく氏は 「話は、わからせるものではなく、感じさせるもの」「じょうずな話より、よい話を」と述べ、実践にあたっても「口から耳へ届けるのではなく、話のこころを子どものこころに届ける」ことを、何よりも大切にするよう指導していただいた。

## c 昔話の残酷性について

授業の中で、“昔話の残酷な場面を、どう子どもに与えたらよいか” が問題となることが多い。  
外国の昔話「おおかみと七ひこのこやぎ」を例にとると、こやぎを食べたおおかみは、おなかを切ら

れ、石を詰め込まれる。のどがかわいたおおかみは、いどに どぶんと落ちて死んでしまう。こやぎたちは、かけよって、「おおかみ しんだ！おおかみ しんだ！」と井戸のまわりでおどってよろこぶ。（グリム童話 F・ホフマン絵 せた ていじ訳・福音館書店）と描かれている。

「このまま与えてもいいものか」の親の質問にたいして、図書館活動をしている司書の川田洋子氏は、つぎのように分かりやすく述べている。「昔話に刺激されて、子どもが乱暴な行動をするということはないですから安心してください。子どもは、大人が考えるようなナマの事実としてではなく、心理的な真実として受け止めているのです。

おなかを切られても血は出たりせず、おおかみは眠っているのです。おおかみという、命をおびやかすほどの悪は、ころされる、つまり存在しなくなる必要があるからです。おおかみはそういう**悪を象徴**しているのです。子どもは、昔話を通じて、「この世に悪が存在すること、でも最後にはそれに打ち勝てるのだということ」を、理解するのです。それは、自分の心の中にひそむ悪を克服することにつながっていくといえます。」

日本昔話でも、命をねらう悪いやまんばは、最後にまめにされて食べられたり（三枚のお札）、かまのなかで焼け死んだりする。（牛方とやまんば）

昔話を安易に筋書きを変えて子どもに与えてしまう傾向は、見直さなければならない。

前述した「伸びる児童文化研究会」（現会長 河部 賀興氏）で、東 君平作の「びりびり」を紙芝居に脚色した。筆者自身教材研究をしつつ、長年にわたって実践してきた。そのたびに、子どもの反応が、様々で幼児の独特の発想に驚かされ、学ぶ点が多かったと思う。学生も共感し、手作りによる「びり びり」を実習などで実践している。

白と黒のモノトーンでシンプルな形が幼児の想像力を広げる。この東 君平の絵本「びり びり」が最近再版されたことを喜ばしく思っている。

末尾に、絵話「びり びり」の実践例とこどもの反応を記録したい。

## 4、おわりに

乳幼児の心を育むための絵本・お話の意義を十分理解し、まず大人が絵本・お話に目を向け、楽しむことが大切であると実感する。「砂漠でみつけた一冊の絵本」（柳田邦男著）のなかで、柳田氏は、次のように述べている。

「最愛の息子を失って、乾ききった心を救ってくれたのが、“スーホの白い馬”の絵本だった。」と述懐する。「絵本とは、魂の言葉であり、魂のコミュニケーションだと思っている。」「すぐれた絵本や物語は、人間のやさしさ、すばらしさ、残酷さ、よろこびとかなしみ、生と死などについて、実に平易にしかも密度濃く、表現していることを恥ずかしながらこの年になって再発見した。人は人生で三度絵本を楽しめる。1度目は、幼少の時、2度目は、親になったとき、3度目は、成人として年を重ねたとき、童心を取り戻し、心に潤いを与えてくれる。」と、“大人にも絵本を”を強調している。

ひとりでも多くの親が、保育者が、絵本や話を介して、乳幼児と心触れ合うかけがいのない時間を

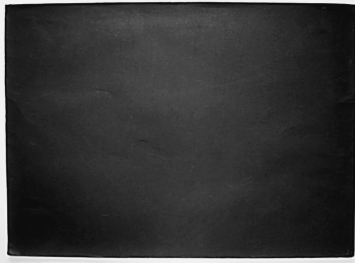
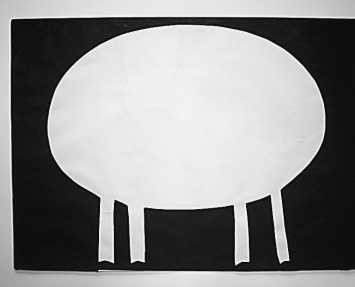
大切にしてくれることを切に願う。子どもの頃の絵本・お話の体験は、心の栄養となって深く蓄えられるだろう。思春期以降の心の荒れ、閉じこもり、ことばとからだの暴力など反社会的行動に走ってしまうことはないだろうと考える。

## 絵話 「 びり びり 」 原作 東 君平作 ビリケン出版

{実践例}

### 題材観

- 単純なおもしろい形、白・黒のモノトーンの絵から、子どもの想像力が広がり、子どもと創っていく絵話である。
- 繰り返しの楽しさ、リズムがあり、数が増えていくおもしろさも楽しめる。次への期待感をふくらませていく魅力が大きい。
- 食いしん坊で好奇心・冒険心いっぱいの主人公「びり びり」に同化しながら、楽しんでほしい。

場面	お話の展開	子どもの反応
1 ページ ( 0 2 8 8 ) 	おや? まっくら、だれもいないのかな? しーっ! 聞こえる。ほら 「グウーグウー」 誰か寝てるみたい。「そこに寝てるのだーれ?」 「むにゃむにゃ」「だーれ?」「びりびり」((眠そ うな声で))「へえ、びりびりちゃん? へんな名前 ね。起こしてみようか?」 「びりびりちゃん起きて」	まっくらな場面をじっと見 て、いろいろ想像している。  子どもも声をだして、びりび りちゃんを起こす。
2 ページ ( 0 2 8 9 ) 	あれ? ベッドからっほ! 「びりびりちゃん、どこ、びりびりちゃん」	子どもと一緒に声をかける。

<p>3 ページ (0290)</p> 	<p>「ハイ、ほくこ」  「あら！びりびりちゃん、おもしろい形ね。何に似てる？」  「おはよう。ほくお腹ぺこぺこ、朝ごはん食べにこよう。なにかおもしろいもの食べたいなあ。  さあ、出発！びりびりトコトコ びりびりトコトコ」(繰り返す)</p>	<p>子どもたちはいろいろ想像する。「たまご」「怪獣」「ぶた」「机」「ランドセル」「てんと虫」「だんご虫」など  「びりびりトコトコ」のリズムを楽しむ。</p>
<p>4 ページ (0291)</p> 	<p>「あっ！いいもの見つけた」  「びりびりちゃん、何見つけたの？」  「あのね、まるくて、かたそう、コチコチ音がしている」「あれ？なんだろう？」  「おいしそう、食べちゃおう」「あら？食べちゃうって」</p>	<p>「時計」「目覚まし時計」  「あかん」「だめ」「おなかいたいよ」「お腹の中で、ジーンって鳴るよ」などびりびりちゃんをとめる。</p>
<p>5 ページ (0292)</p> 	<p>「びりびりトコトコ」と近づいて、  「おいしそう！ほく、珍しいもの、大好き。いただきます。ムシャムシャあれ！  おなかが おなかが痛い、いたーいよう」  「びりびりちゃん大丈夫？」</p>	<p>「えっ！たべるの？びりびりちゃん」「だめだよ」など</p>
<p>6 ページ (0293)</p> 	<p>「痛い、いたーいよう」  ビリビリビリー！破れちゃった！」  「わあー大変！びりびりちゃん」    「大丈夫！ほーら」</p>	<p>子どもたち、どうなるかと真剣にみている。。</p>
<p>7 ページ (0294)</p> 	<p>「あれ？びりびりちゃん、2人になっちゃった。お名前教えて」  「びりびり1ちゃん、びりびり2ちゃん」(「びりびりけんちゃん」など子どもの名前をつけてもよい)  「おなかがすいたね。いいもの食べよう」「びりびりトコトコ、びりびりトコトコ」</p>	<p>あっと驚き、歓声があがる。    びりびりちゃんの名前を楽しむ。</p>

<p>8 ページ ( 0 2 9 5 )</p> 	<p>「いいもの見つけた！やわらかそう」  「なに見つけたの？」  「だめだめ、それ食べられないよね」  「やわらかいもの、平気 平気、いただきます」  「ムシャムシャ、・・・あれ！お腹が、いたーい」</p>	<p>「靴下」「ながぐつ」など想像  していう。  「食べたら、おなか痛くなる  よ」</p>
<p>9 ページ ( 0 2 9 6 )</p> 	<p>ビリビリビリー  あれー びりびりちゃん  だいじょうぶ？</p>	<p>あーあ、破れちゃった。  びりびりちゃん  どうなるのかな？</p>
<p>10 ページ ( 0 2 9 7 )</p> 	<p>「あれ！4人になっちゃった。名前教えて」  「びりびり〇〇ちゃん」・・・・・・・・  「びりびり〇〇ちゃん」・・・・・・・・  「さあ、おいしいもの食べに行こう。出発！」  びりびりトコトコ、びりびりトコトコ</p>	<p>わーい、4人だ！   子どもたちも、いっしょに、  出発！</p>
<p>11 ページ ( 0 2 9 8 )</p> 	<p>「いいもの 見つけた。丸くて小さいよ」  「それ、なーに？」   「小さいもの、平気 平気、いただきます」  あれ！おなかが おなかが・・・イタイイタイ」</p>	<p>「ボール」「ボタン」「石」  「ビーダマ」など  「食べられないよ」  「また やぶれるよ」</p>
<p>12 ページ ( 0 2 9 9 )</p> 	<p>ビリビリビリビリ・・・・・・・・  「わーい、破れちゃった！」  「びりびりちゃん、だいじょうぶ？」</p>	<p>「また、やぶれた」  「やっぱり」  「びりびりちゃん、増えるよ」  「きっと、8にんだよ」と予  想したりする。</p>

<p>13ページ (0 3 0 0)</p> 	<p>8人になっちゃった1「名前を教えて」 「びりびり〇〇ちゃん……………」 8人のびりびりちゃんの (名前を呼ぶ)</p>	<p>「わーい」「増えた」 「やっぱり」など歓声があがる。</p>
<p>14ページ (0 3 0 1)</p> 	<p>—歌が聞こえてくる— (あめちょこさん、どんぐりころころなど、知っている短い歌) 「おいしそう！歌をたべちゃおう」  「歌なら大丈夫、いただきます。」(歌をおいしそうに食べる)</p>	<p>「だめだめ、歌はだめ」 「破れるよ」など</p>
<p>15—① (0 3 0 2) ページ 15—② (0 3 0 3)</p>  <p>(紙は2倍の大きさとなる)</p>	<p>おなかが おなかが…いたいいたい… びりびりびりびりー！ びりびりびりびりー！ 「びりびりちゃん16人になっちゃった！」(名前を呼ぶ) 「いっぱい いいもの食べたね。もうおうちへかえろう」 びりびりトコトコ びりびりトコトコ びりびりトコトコ (折りたたんで)</p>	<p>子どもたちは、横長にずらっと並んだびりびりちゃんを見て、喜ぶ。 16人のびりびりちゃんを楽しむ</p>

16ページ (もとの1ページの 真っ暗な場面にもどして )

「電気を消して、おやすみなさい。びりびりちゃん」

17ページ (2のベッドの場面)「さあ、仲良くおやすみ、びりびりちゃん、もっとくっついて、ベッドから落っこちないように、びりびりよっちゃん足が出てるよ。  
(みんな くっくと)

18ページ ③のびりびりちゃんの場面「もとのびりびりちゃんになっちゃた。おやすみなさい。また遊ぼうね。おふとんきて寝ましょ。(表紙の白い画用紙をかぶせてあげる)

子どもは、終わった後、「びりびり トコトコ」と口ずさんだり、「びりびりちゃん、まだ寝てる？」  
「いっしょにお散歩しよう」などびりびりちゃんと、友達になった感じで、親しみを示すことが多い。

#### {引用文献}

- 「えほんのせかい こどものせかい」 松岡享子著 日本エディタースクール出版
- 「絵本の森へ」 松居 直著 日本エディタースクール出版
- 「砂漠でみつけた1冊の絵本」 柳田邦男著 岩波書店
- 「変貌する現代絵本の世界」 永田桂子著 高文堂出版
- 「子どもは話が大好き」 吉岡たすく著 雷鳥社
- 「昔話の深層」 河合隼雄著 福音館書店
- 「ブックスタート ハンドブック」 NPOブックスタート出版
- 本学紀要 第30号筆者「幼児の想像力と遊び」